

vol. 279 /
May. 31st 2019

5

緑さす、青空の足元

Sunshine through Foliage, under the Azure Sky

初夏。花が散った木々に芽生える新緑。

5月の陽気、外に彷徨い出でて。

都内の庭園と、研究室の新たなメンバーを特集します。

—Contents

- P1~P5 いま、日本庭園を振り返る
P6~7 東京都職員に聞いた庭園のあれこれ
P8 ようこそ B4 生拓け我が道

いま、日本庭園を振り返る

text_FUJIWARA / M2

Review The Japanese Garden

今年度から都市デザイン研究室には宮城教授が加わり、緑地系出身の学生も増えてきているが、私たちは庭園についてあまり知らないのではないだろうか。例えば、東京大学本郷キャンパスには育徳園と懐徳園という2つの庭園がある。育徳園心字池を通称三四郎池として知っている人はいるだろうが、キャンパス南部にある懐徳園を知っている人は少ないのではないか。（懐徳園は年に1回、11月に行われるホームカミングデーで一般に公開される。）

ということで今回、改めて自身が庭園について勉強するため、読者の皆様に庭園をより良く知って頂くため、東京都内にあるいくつかの庭園を訪ねてみることにした。庭園を見て回る前に、日本庭園の歴史について以下にまとめてみたい。

広い意味での「庭園」としては縄文、弥生、古墳時代に造られた祭祀、儀式的のための空間があり、日本の庭園の源流とも考えることができると言われている。その後、大陸からの庭園文化の伝来や国内の芸術文化、建築、生活空間に対応して様々な庭園が造営されていった。飛鳥時代には蘇我馬子の邸宅などの庭園が造営され、平安時代に入ると、大池泉庭が発展し、寝殿造に合わせて寝殿造庭園が1つの様式として完成した。平安末期には極楽浄土を表現した浄土式庭園が登場する。鎌倉時代でも浄土式庭園は造られるが、武家文化の興隆から変化が表れてくる。室町時代では禅宗の思想や自然観を反映した枯山水式庭園が新しい庭園様式として発達する。桃山時代は豪華な池泉を設け、それを書院などの建物から眺める庭園様式が誕生する一方で、茶の湯のた

めの露地も後世の庭園様式に大きな影響を与えている。江戸時代になると京都近郊では宮家により、江戸やその他の城下町では大名により数多くの庭園が造営された。鎌倉時代からの回遊式庭園が、池泉の周りを歩きながら鑑賞する池泉回遊式として完成した。明治以降は近代化に伴い自然風景式や和洋折衷式、近代式などの庭園が造られていった。

下表に日本の庭園様式の歴史の変遷とその代表例をいくつか挙げてみた。今回紹介する庭園以外にも多数の庭園がある。ぜひ訪れていただきたい。



育徳園心字池

時代	主な様式	代表的な庭園
平安時代	寝殿造庭園	神泉苑（京都） 大覚寺嵯峨院（京都）
	浄土式庭園	平等院鳳凰堂（京都） 毛越寺（岩手）
鎌倉～南北朝時代	移行期	鹿苑寺（京都） 西芳寺（京都） 天竜寺（京都）
室町時代	枯山水式庭園	龍安寺方丈庭園（京都） 大仙院（京都）
安土桃山時代	池泉鑑賞式庭園	醍醐寺三宝院庭園（京都） 二条城二の丸庭園（京都）
	茶庭	知恩院（京都） 桂春院（京都）
江戸時代	池泉回遊式	桂離宮（京都） 偕楽園（茨城） 六義園（東京）
	枯山水式庭園	大徳寺方丈庭園（京都） 南禅寺方丈庭園（京都）
明治時代	自然風景式庭園	無鄰菴（京都） 平安神宮（京都）
	和洋折衷式庭園	新宿御苑（東京） 赤坂離宮庭園（東京）
	近代的公園	日比谷公園（東京）

日本庭園の主な様式の変遷（小沢幸四郎、直江宏（2004）
『1級造園施工管理技士 受験100講』、山海堂を参考に筆者作成）

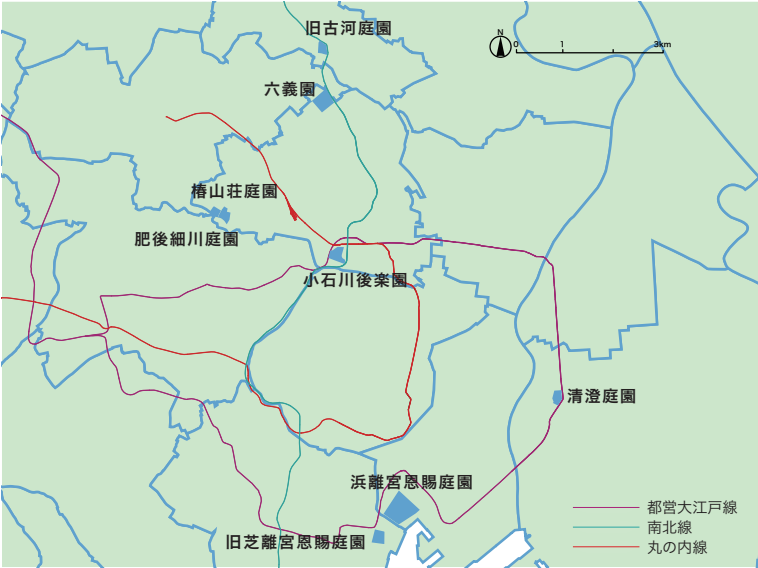
東京の庭園を訪ねて

Visit some Gardens in Tokyo

text_FUJIWARA / M2 NISHINO / M1

全9箇所の都立庭園の入園料が無料となる5月4日のみどりの日（10月1日の都民の日にも都立庭園の入園料が無料となる）に、都立庭園のうち旧芝離宮恩賜庭園、浜離宮恩賜庭園、小石川後樂園を訪れた。前者2箇所は徒歩で經由できる距離にあり、小石川後樂園も浜離宮恩賜庭園の最寄駅である汐留駅から都営大江戸線で乗り換えなしに向かうことができる。また同日に都立庭園ではないものの、比較的新しく改修された肥後細川庭園と椿山荘庭園を訪れた。そして別日に、東京大学から比較的近い六義園と「春のパラフェスティバル」が開催されていた旧古河庭園、筆者が授業で清澄白河に行く機会がある清澄庭園を訪れた。

椿山荘庭園、旧古河庭園を除いた5箇所は、いずれも同じ江戸時代に造営された池泉回遊式の庭園であるが、庭園の構成や歴史、見え得る景色は唯一無二であり、それぞれ違った趣を感じることができる。ここではそれらの庭園について概要説明とともに我々が直接訪れた上で感じたこと、思ったこと、気が付いたことをまとめてみた。純粋な感動、驚き、発見は現場で五感を研ぎ澄ませたが故の産物である。是非この記事を通して、これらの庭園風景を思い描き、思慮を深め、実際に足を運ぶきっかけとなってもらえれば幸いである。（各庭園の地図と説明は、東京都が発行する都立庭園パンフレットを参考にしている。）



巡った庭園の分布（基盤地図情報から筆者作成）



中央の大泉水と苑路というシンプルな構成



満開のツツジが出迎える



多様な植栽が見られる

見立て

見立てとは自然風景や理想郷、宗教的な世界などをそのまま写実的に再現するのではなく、池や石組みなどを用いて象徴的に表現したものである。室町時代に発達した枯山水庭園はその最たるもので、石組みと白砂などを用いて、山水の景観や禅の思想、世界観を表現している。東京都内の枯山水庭園は青梅市の玉堂美術館のものが有名である。

写真は旧古河庭園の日本庭園にある州浜である。中心の池を海に見立てて、その水辺に白い玉石を並べることで砂浜を表現している。その他にも園内には石組みを用いて渓谷や滝、荒磯を表現しており、見立ての技法がふんだんに取り入れられている。



都心の中にあることを実感させられる

旧芝離宮恩賜庭園

海面を埋め立て造られた江戸幕府の老中・大久保忠朝の邸地に、上屋敷を建てる際に作庭した大名庭園楽寿園を起源とする池泉回遊式庭園である。作庭当時は海岸に面しており、汐入の庭であった。幕末には紀州徳川家の芝御屋敷となり、明治に有栖川宮家の所有となった後に宮内省が買い上げ、芝離宮となった。関東大震災によって、建物や樹木のほとんどが消失してしまったが、その翌年に東京市に下賜され、一般に公開されるようになった。1962年には東海道新幹線敷設のための用地としておよそ1500坪もの面積の敷地を割譲することとなった。1979年には国の名勝に指定されている。1999年には東京都景観条例で「特に景観上重要な歴史的建造物等」に定められた。都内では小石川後樂園とともに、今に残る最も古い二大庭園のひとつである。

浜松町駅から歩いて1分程度と近く、とてもアクセスの良い庭園であり、庭園様式も典型的な池泉回遊式で苑路は比較的シンプルに設けられているため、初めて訪れるのには手ごころな庭園という印象である。庭園の規模はそれほど大きくはないが、大部分を占める大泉水とそれを取り巻く石組がこの庭園を象徴づける重要な要素となっている。特に石組によって滝を流れる水を表現した枯滝は、それそのものが苑路となっており、石組の力強さを間近に感じることができた。枯滝の苑路を進むと、大きな築山にたどり着く。この築山を登った頂上から見下ろす景色は素晴らしい一方で、池を隔てて対岸にある藤棚から見るこの築山はそれ自体も景観を構成する要素となっている。2つの機能が込められている。周囲に高層ビルがそびえ立ち、都心の中の箱庭という印象で、平日に訪れた際には近くの会社員であろう人たちが昼休みにお弁当を食べている姿も見られた。都心部に存在しているからこそ見られるアクティビティであろう。



複数の水辺ごとに違った景色が見える



背景にそびえたつ高層ビル



中島の茶屋には多くの外国人が

浜離宮恩賜庭園

東京湾から海水を取り入れた潮入の池と、2つの鴨場を有する江戸時代に造成された徳川將軍家の庭園である。1654年、徳川將軍家の鷹狩場に四代將軍家綱の弟の松平綱重が海を埋め立てて別邸「浜御殿」を設け、その後綱重の子、綱豊が六代將軍になったのを契機に、この屋敷は將軍家の別邸となった。以来、歴代將軍によって幾度かの造園と改修工事が行われ、十一代將軍家斉の時代にほぼ現在の姿となった。明治維新後は皇室の離宮となり、「浜離宮」に名称が変わった。関東大震災や戦災によって、御茶屋や数々の建造物、樹木が損傷し、往時の面影はなくなったが、1945年に東京都に下賜され、整備ののち1946年に「浜離宮恩賜庭園」として公開され、1952年には「旧浜離宮庭園」として国の特別名勝及び特別史跡に指定された。近年、かつて園内にあった複数の建築物の再建計画が進められており、2010年に「松の御茶屋」、2015年に「燕の御茶屋」、2018年に「鷹の御茶屋」などの御茶屋が復元されている。

庭園に入って、まず驚くのはおよそ25万㎡という広大な面積。大泉水とそれを取り巻く苑路に様々な樹木、お花畑、各所に設置されているお茶屋、これらを隈なく見て回るだけで1日十分に過ごせそうなほどであった。一方で、その規模であるからこそ背景にそびえ立つ高層ビル群の主張が強く、都会の喧騒から離れたといった雰囲気ではない。元々この地で東京湾を臨むことが出来たと考えると物寂しさも覚えるが、水と緑とビル群が融合した景観は壮大で、現代の新たな魅力としても考えられる。南部の大泉水には橋を渡って中島の御茶屋があり、ベンチに腰を下ろしてお茶を楽しむ人々の姿が印象的であった。ウォーターフロントの利用がまだまだと言われる日本の都市空間において、水辺に親しみつつ憩う場は貴重なもので、大きな魅力の一つであろう。



高台から園内を一望できる



入口から落ち着いた雰囲気が広がる

借景

借景とは庭園外の山や森林などの自然物などを庭園内の風景に背景として取り込むことで、庭園と背景となる風景とを一体化させてひとつの景観とする手法である。借景といっても単に庭園景観の背景として活かすだけでなく、むしろ借景が庭園の主景となる場合もあり得る。借景を用いた庭園としてはともに比叡山を取り込んだ京都の修学院離宮や圓通寺が有名である。近年は都市開発により、借景としていた背景の自然景観そのものが開発されたり、周囲に高層ビルなどが建設されたりと借景にも変化が生じている。

写真は浜離宮恩賜庭園であるが、背景に汐留、新橋の高層ビル群が入り込んでいる。これを現代的な「借景」として歓迎するべきか、往時の景観を破壊するものとして批判するべきか議論が分かれるところであろう。



敷地南の築山から大泉水を眺める

肥後細川庭園

文京区目白台の台地の自然景観を活かした庭園で、江戸時代中頃まで幕臣の邸宅があったところであった。その後、幾度かの所有者の変遷を経て、幕末に細川家の下屋敷になり、明治時代には細川家の本邸となった。1960年に東京都が当地を購入し、翌年には公園として開園。1975年、文京区に移管されて現在にいたる。この庭園は目白台からの湧水が豊富で、その湧水を生かした庭園となっており、江戸時代の大名屋敷の池泉回遊式庭園の雰囲気を楽しむことが出来る。

浜離宮恩賜庭園などの都立庭園と比べるとスケールは小規模であった。池を挟んで尾根が走り、自然地形をそのまま生かしていることがうかがえる。細川家が住まいとして使用していた松聲閣は保存、修復されており、無料で入ることができた。中では庭園の変遷に関する資料映像が閲覧でき、その場で歴史を知った上で鑑賞することができる。

椿山荘庭園

この地は、南北朝時代から椿が生ずる景勝地であったため、「つばきやま」と呼ばれていた。江戸時代に久留里藩黒田氏の下屋敷であったところを1878年に山縣有朋が購入し、自分の屋敷として「椿山荘」と命名した。山縣有朋は椿山荘において趣味である作庭を行っており、この庭園は無鄰菴、古稀庵と並んで近代日本庭園の傑作と称されている。現在は敷地内にホテル椿山荘東京が開業している。

今回巡った庭園の中で唯一水の流れる音を落ち着いて楽しめる庭園であった。庭園を構成する要素は単にそれぞれの樹木や水、石の姿といった目で感じるだけではなく、葉擦れや水の流れなどの聴覚、砂利を踏んだ時の触覚によるものもあるのだと思われた。空間としては園路も細く、ヒューマンスケールで静寂に包まれていた。

縮景

縮景とは古典で紹介された名所や和歌で詠まれた自然風景の魅力や特徴を強調し、庭園という限られた空間の中に凝縮して再現する技法である。広島縮景園は中国杭州の西湖などのいくつかの景勝地を縮景として取り込んでいると言われている。写真は小石川後楽園で、これも西湖の堤を表現したものである。小石川後楽園にはこのほかに国内外の景勝地が縮景として配置されており、琵琶湖を見立てて造られたとされる池を1周回るだけで、杭州の西湖、京都、駿河、信州、奈良などの名勝を見た気分になることができる。池を周りながら、移り変わる景色を楽しむ池泉回遊式庭園の特徴を反映しているとも言えるだろう。



小石川後楽園

1629年に水戸徳川家水戸藩初代藩主である徳川頼房が築き、二代藩主の光圀が改修し完成させた池泉回遊式の庭園である。後楽園という名は『岳陽樓記』の「天下の憂いに先立って憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」から名づけられており、岡山市にある後楽園と全く同じ由来である。庭園内には、大泉水を中心に、梅や桜などが植えられ、四季を通じて情緒豊かな景色が広がり、また中国の文人たちが好んで歌った西湖や廬山（江西省）も採り入れている。光圀は朱舜水を設計に参加させたといわれており、中国的、儒教的な趣好が濃厚な庭園となっている。1869年の版籍奉還により明治政府に奉還され、その後、東京砲兵工廠の敷地の一部として陸軍省の所管となった。1952年には文化財保護法に基づく国の特別史跡および特別名勝に指定されている。この重複指定を受けているのは全国でも小石川後楽園、浜離宮恩賜庭園、金閣寺などごくわずかである。現在は、都立公園として整備され、公開されている。

入口からすぐに開けた大泉水が目の前に広がる。大泉水の周りには今でも舟着場と思われる場所がいくつか確認することができ、昔はここから舟を出して池の中方風景を眺めて、楽しんでいたのではないかと想像を膨らませながら物思いにふけるのも面白い。その大泉水から派生して複数の小空間に分かれており、多様な景色、規模の空間があることは庭園を鑑賞していて退屈さを感じさせないと同時に、それぞれの景色の移り変わり、小空間から大空間へ足を踏み入れるときの開放感に強い感動を覚える。訪れた際には白糸の滝が改修中のため見られなかったものの、臨時で設けられた通路はとても水面に近く、今までにない距離で楽しめた経験には新しい庭園の鑑賞の形の可能性を感じた。これは小石川後楽園ならではの背景に東京ドームシティのジェットコースターが見えており、庭園を鑑賞しながら時折悲鳴が耳に入るのは中々可笑しさを感じる。



洋館の石と庭園のバラのコントラストが美しい



和と洋の庭園の造りの違いがその場で分かる



洋風庭園は洋館に対して左右対称である



樹木に包まれる温かさを感じる



背景に垣間見える東京ドームに賑やかさを感じる



大泉水を中心にいくつかのゾーンに分けられている



水面に映ると満月のように見える



京都の渡月橋を表現している

旧古河庭園

武蔵野台地の斜面と低地を活かし、北側の丘には洋館、斜面には洋風庭園、南側の低地には日本庭園を配しているのが特徴である。この土地は元々、陸奥宗光の邸宅であったが、宗光の次男が古河家の養子になる際に古河家の所有となった。現存している洋館と洋風庭園は鹿鳴館やニコライ堂などを手掛けたジョサイア・コンドルによるもので、日本庭園は無鄰菴や平安神宮神苑などを手掛けた京都の庭師・植治こと小川治兵衛によるもので、洋と和の庭園が共存している珍しい庭園である。旧古河庭園は大正初期の庭園の原型をとどめる貴重な存在であり、2006年に国の名勝に指定されている。

訪れた日は「春のバラフェスティバル」が開催されており、平日にも関わらず多くの来訪客で賑わっていた。80種以上の色とりどりに輝くバラの美しさもさることながら、それらを額縁のように引き立てている幾何学的な庭園の様式美にも見とれてしまった。階段をおりると、また違った世界が眼前に広がっていた。この日本庭園は低地に造営され、周りの景色を見上げるようになっているからか、池泉をめぐるのとどこことなく包まれたような安心感があった。左右対称に彩られたバラ、洋風庭園の煌びやかさを味わうことができる一方で、日本庭園では木漏れ日の中、落ちていて時が流れるのを楽しめる。2つの対比の中にその双方の良さを感じられる庭園であった。



大泉水に浮かぶ島々がアクセントになっている



奥の築山は富士山を表している



地盤沈下で石が沈んでいるところもある

清澄庭園

大名屋敷の跡地を三菱財閥の創業者である岩崎弥太郎が買い取り、造成した(当時は深川親睦庭園)、池泉回遊式の庭園である。元々、隅田川の水を仙台東川を通じて園内の大泉水に引水し、潮の満ち引きで変わる池の景観を楽しんでいたとされるが、関東大震災で水門が壊れた影響で現在では潮入の形ではなく、水は雨水でまかなわれている。また、関東大震災の際には火災の被害が多かったこの地で図らずも避難場として機能し、2万人という多くの住民の命を救った。その後に震災の被害が比較の少なかった東側が東京市に寄贈され、清澄庭園として整備、開園され、1979年には東京都の名勝に指定されている。震災の被害が大きかった西側は東京都が購入し、清澄公園として整備され住民の憩いの場となっている。弥太郎は石を好んだとされており、庭園内には全国各地から自社の汽船を用いて取り寄せられた石組みが多く見られる。石組みにより滝を表現した枯滝や、築山にサツキやツツジの刈り込みで雲を表現した富士山が庭園内の見どころとなっている。

池泉、林泉とともに各地から集められた名石が印象的で、それらを辿りながら歩くだけでも面白い。「枯滝石組」や「富士山」など景観を抽象的に庭園内に表現したものは、事前に調べなければその意図に気付くことは難しい。むしろ初めて訪れたときは新鮮な目で庭園を鑑賞し、その後に説明を見た上で2回目に訪れたときに「これはそういう意味があったのか」と気づきの喜びを覚えるのも楽しみ方の一つであると感じる。訪れた日には、隣接する清澄公園では地元の住民が歩行する姿や子供達が遊ぶ姿が見られた一方、清澄庭園では外国人の憩う姿が多く見られた。元は一つの庭園であったものの、今では性格の違った空間として人々に親しまれていることがうかがえた。

六義園

徳川綱吉の側用人である、川越藩主・柳沢吉保が下屋敷として造営した庭園である。加賀藩の旧下屋敷跡地を綱吉から拝領した柳沢は、約2万7千坪の平坦な土地に土を盛って丘を築き、千川上水を引いて池を掘り、7年の歳月をかけて、起伏のある景観をもつ池泉回遊式の庭園を造り上げた。「六義園」の名称は、『古今和歌集』の序文の「六義」(むくさ)という和歌の六つの基調を表す語に由来しており、この「六義」を『古今和歌集』にある和歌が詠うままに再現しようとしたものがこの六義園である。明治時代に入って、岩崎弥太郎が購入し、別邸として整備が施された。その後は関東大震災による被害もほとんど受けず、1938年には東京市に寄贈され、公開されるようになり、東京大空襲の被害を受けることもなく、造園時の面影を残した六義園は、1953年に国の特別名勝に指定されている。

六義園に入って、始めに出会うのは大きなしだれ桜である。訪れたときには、新緑をまとった鮮やかな葉桜となっていた。木漏れ日を抜けていくと、急に空が広くなり、それが庭園の始まりを教えてくれる。これまでの都立庭園とは何か違うものを感じたが、それは静けさである。都心三区にある浜離宮庭園や旧芝離宮庭園、遊園地に隣接している小石川後楽園などとは異なり、周囲は閑静な住宅地であるため、せわしない時の流れを忘れ、庭園を鑑賞することができる。というのもこの付近は山手線沿線及び内部ではかなり珍しい、第1種低層住居専用地域に位置付けられているのである。庭園内を大きく占める大泉水ではあるが、苑路を進むにつれて一度視界から姿を消す。さらに苑路を進むと沿うように水路が現れ、そしてその先に再び大泉水が姿を見せるのである。このように姿が見え隠れすることによる「風流さ」も日本庭園の魅力であると感じる。



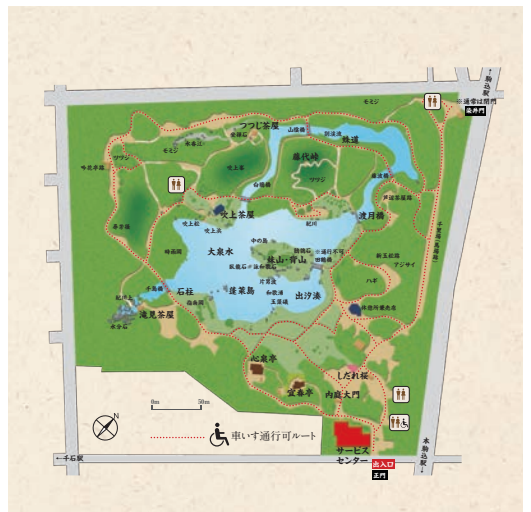
水面にはっきりと映る木々と青空



築山から大泉水を臨む



4月には美しいツツジが咲く



各所に和歌で詠まれた景色がちりばめられている

東京都職員に聞いた庭園のあれこれ

Some Aspects of Gardens of Tokyo asked in the Interview with the Government official

今回、都内のいくつかの庭園を見て回ったが、その中で気になるところや疑問に思うところがあった。

そこで、筆者が学部生の時に所属していた東京大学農学部緑地創成学研究室のOGで、現在は東京都の造園職として働いていらっしゃる山内彩加さんに東京都の庭園行政について伺った。

(聞き手：M2 藤原 M1 西野)



燕の御茶屋

松の御茶屋に続いて、平成27年に復元された御茶屋。家斉の時代に建てられた御茶屋で、歴代将軍が調度の観賞や食事、和歌を詠むと言った接客の場として利用されていた。

ー現在の仕事内容を教えてください。

私は今、東京都建設局の東部公園緑地事務所に所属しています。建設局は都市公園法で規定された都市公園を扱っていて、東部公園緑地事務所は東京23区内の都市公園を主としています。私はその中でも都立庭園で工事の発注や、現場を見に行き注文通りに工事が進んでいるか、安全上問題がないかの確認などの業務を行なっています。都立庭園は文化財庭園という、文化財保護法で文化財に指定されているようなところですね。

2020年のオリンピック・パラリンピックに向けて

ー東京都として現在、公園緑地についてどういった方針で施策が展開されていますか。

東京都はオリンピック・パラリンピックに重きを置いて、「2020年に向けた実行プラン」の中でいくつかの施策を掲げています。その3本柱が「セーフシティ」、「ダイバーシティ」、「スマートシティ」で、公園緑地に関することはスマートシティの中で扱われています。水と緑に囲まれた自然を感じられるまちをつくらうという方針のもと、街路樹の整備や都市緑地の保全、生態系に配慮した緑地の創出といった大枠が決められています。そこから建設局や港湾局などの各組織ごとに具体的な施策が決められていきます。

建設局は主に道路、河川と公園緑地を3本柱としており、その中で公園緑地部は2020年に向けて都市公園について事業を進めています。都知事が都立公園を改革していく方針を掲げていることもあり、例えば公園では禁止事項が多くありますが、欧米の公園に倣って自由な活動ができるように規制解除をしていこうとか、公園にもっと商業施設を誘致して多様な利用ができるようにしようといったことが検討されています。でも、軸にあるのは2020年のオリパラで、現在はそれに向けて主体的に動いています。

ー2020年までに整備してきた都市公園について、それ以降の利活用の方針はありますか？

今のところ、オリパラの会場として整備したところについてはレガシーとして今後の利活用について考えないといけないという流れにはなっていますが、まだ具体的な形にはなっていません。今はオリパラまでに必要な整備などを行っていて、そろそろオリパラの次を考えないといけないという話はあるものの、なかなかそれができずに先送りになっています。

ーオリンピックの話になりましたが、外国人観光客の増加などが想定される中で、庭園について何か新しい取組はありますか？

庭園は文化財であるため、ハード面に対応するというのは難しく、管理している指定管理者が外国人対応ができる職員を募集したり、案内板を設置するなどのソフト面で対応しています。

新しいと思ってもらえるか分かりませんが、4年ほど前から庭園や動物園などの施設でアプリで案内をする取組が始まっていて、現在では浜離宮や六義園、上野動物園や葛西臨海公園で実施されています。行政の仕事は基本的に法律ベースでやらないといけないので、新しいものをすぐに取り入れるというのが難しいところがあります。民間で考えたら「いまさらアプリ？」と思われるかもしれませんが、これから進めていくような形です。

あと新しい取組と言えば、いま熱心に行っているのが、私も担当しているライトアップです。イベントとしては色々ところでやっていますが、ライトアップ用に整備された公園ではないので配線が見えてしまうという問題があるんですね。今後海外からも多くの人が来る中でそのような状況は見せられないという話は前から出ていて、ライトアップをしても配線が不格好にならないような工事ができないかという議論はされています。ただ文化財庭園なので何でも地面に埋められるわけではないので、うまく整備ができないかというのにも考えないといけないですね。本格的にライトアップのための整備を庭園でやるのはあまりないと思いますね。

「管理」から「活用」へ

ー外国人や若い人など多様な層に庭園を楽しんでもらえるようにしているということですね？

そんな感じです。「おもてなし」をキーワードにやっています。これまででは文化財を保存して管理していくという方針であったのが、平成27年頃から保存して活用していこうという方針が変わっていています。もちろん文化財である以上大きな改変はできませんが、単にとっておくのではなくて色々な人に来てもらって活用していこうという方針にここ数年で変わってきていて、現在はその中で何ができるかを考えています。

ー浜離宮には中に入ることができない御茶屋がありましたが、今後これらの御茶屋も一般の人が利用できるようにするという方針でしょうか？

浜離宮には御茶屋が全部で4つあり、大泉水の中の中島の御茶屋は復元的整備と言われており、中で営業していて、出入り自由で飲食もできます。最近復元された3つの御茶屋のうち、鷹の御茶屋はもともと、御茶屋の裏にある鴨場で鷹を使って鴨猟をするときの待合として使われていたようで、復元の際にもそのようなことを踏まえて復元されたので、御茶屋というより土間のような感じの建物で自由に入れます。

一方で松の御茶屋と燕の御茶屋はしっかりとした御茶屋になっています。実際、東京都から国にこの御茶屋に常時人が入れるようにするということは可能かという相談をしたことがありますが、中に入る人にもマナーが必要で、来場者全員に徹底させることができない現状を考えると閉めておくしかないということでした。毎週木曜日に御茶屋ガイドツアーは行っていますが、特別な建物であるため、誰でも自由に入れるというようにはなっていません。



2020年に向けた実行プラン

東京オリンピック・パラリンピックの成功、その先の都政の大きな方向性が示され、東京の都市力や都民生活の向上に繋がる様々な施策が展開されている。



Tokyo Parks Navi

庭園や公園のおすすめコースがいくつか紹介されている。コースに沿って歩き、スポットに近づくと、自動的に音声ガイドが始まり、その歴史や見所を解説してくれる。



六義園

上が現在、下が 1905 年の姿である。およそ 100 年の時が経ち、特に右側の樹木が大きく成長し、以前の景観とは変化が見られる。（『都立庭園カレンダー 2019』より）



小石川後楽園内庭

元々はこの内庭がある側の東門が入口であったらしい。池の中の島へとわたる橋には立入禁止の掲示があったが、これは安全管理の都合上こうになっているとのこと。

一実際、マナー関連で問題などはありますか？

建物の中でというのではないですが、以前、浜離宮で工事をしていたときに、工事が終わった後にまだ入れない場所をロープで囲って、張り紙をしていたのですが、それをまたいで入ってくるといことはありました。日本語が分からない外国人というわけではなく、日本人でもただ道を歩くというレベルで、そのようなことが起こるので、難しいなと思います。

一色々な人を入れていくとそのような問題も起きてくるということですね。それに対して入園料を高くしようというようなことはありますか？

そういうことはないですね。管理、運営は指定管理者が行っていて、入園料を上げた結果として入園者が減ってしまうと、経営に支障が出るのだと思います。そういうこともあって入園料は簡単には上げられないし、上げて入園者を減らすことも考えてないと思います。

過去の姿、現代の姿

一これからの庭園を考えるうえで、例えば、背景に高層ビルが入るなどの問題について取組などはありますか？

指定管理者が維持管理として気を付けていることはあるかもしれないですが、東京都が整備として行うには、たとえば木を 1 本植えるだけでも国の許可が必要なので、高層ビルを隠すという理由だけで高い木を植えることはしません。最近、そのような問題については都としても話題になっています。もともと庭が作られた頃は現在の植えられている森のように背の高い木ではなく、ある程度成長が抑えられ、仕立てられた木が植えてありました。それがもとの庭園の風景であるからと当時の姿に戻そうとして木を切ったり、透いたりすると高層ビルが見えるようになってしまいます。それを現代における庭園の姿ということで良しとする考えもありつつ、やはり森のようであるのは

不自然だという考えもあります。そのような中で浜離宮庭園を今後どのようにしていくかという話を景観系の先生に話を聞きながら、進めていこうということにはなっています。

また、庭園のある年代の姿を目標としてその当時の姿にしていこうという取組もあります。「東京都における文化財庭園の保存活用計画」にも載っていますが、浜離宮庭園では徳川家斉の時代の姿に戻していこうという方針があります。家斉の時代の姿に戻すことを考えたときに、全てその時代のものにしようとする、周りの高層ビルが見えるようになってしまいますし、周辺の様子が家斉の時代とは違うという状況において、庭園の中だけ家斉の時代にすればいいのかというような話はあります。

一小石川後楽園や清澄庭園などはもともと河川から水を取っていましたが、そのシステムを復元するようなことはないでしょうか。

今のところ、そういう話は出ていません。なぜかという公園は都市公園法の下にあります、河川は河川法という別の法律の下にあるんですね。そのため、公園の雨水は公園で、川の水は川で処理しないといけないというルールがあり、川の水を公園内に流すということは基本的にはできなくなっています。現在の法律では庭園の中に昔の水の流れを復元させることは難しいので、東京都ではそういう話はしていないんです。

一例えば、小石川後楽園で滝の修復を行っていましたが、あれも東京都の方針によるものですか？

まさに現在、その白糸の滝の修復をやっています。滝の水が落ちる様子が白い糸のようであることがその名の由来でしたが、時間が経つ中で白い糸のようには見えなくなってきたので、白糸の滝という名前にそぐう形に戻すために修復しましょうと、専門の先生などからご意見を頂いて、始まった事業で、必ずしも東京都から事業が始まるということでもありません。あまり東京都として自由に修復や整備をすることはできなくて、文化財的な制限のほかにも、木を植えたり、石を置いたり

する際にも専門家の指導が入ります。この間は、真鶴まで新しい石をとりに行ったりもしました。

どこからが「本当の庭」か？

一山内さんとしては、庭園をこうやって見て回ると面白いなどありますか？

どこからが「本当の庭」なのかというのを考えながら歩くと面白いです。例えば、浜離宮だと一般的に入る大手門から大泉水に至るところまでは元々屋敷があったところで庭ではなく、大泉水の手前からが本当の庭なんです。小石川後楽園も正門は今の入口ではなく、東京ドーム側の東門でした。東京ドームの方にあった大きな屋敷に付属する小さい内庭を抜けて、ちょうど復元工事が始まった唐門という大きな門をくぐり、深い森を抜けた先にパッと大泉水が広がっていくというメリハリのある景色が作られています。他には旧古河庭園でもあえて道を曲げて、その先に大きい灯籠などを見せるというような作り方をしています。こういった造り方は色々な庭園であるので、このように、ここからが昔の庭の入口なんだというのを意識して入って、曲がりくねった道もどういったことをイメージして作られているのか考えながら歩くとすごく面白いです。これは本で読んだ話ですが、庭にも起承転結があるらしいです。パッと大泉水に開くところが転とか。

一最後に、好きな庭園を教えてください。

大前提として全部の庭園をおすすめしたいですが、その中でもいいなと思うのは向島百花園です。浜離宮庭園はいかに大名庭園というような感じがしますが、向島百花園はこじんまりとしている中に、色々な植物や花がたくさん生えていて、それぞれに樹名板がついています。すごいきれい、華やか、っていう感じではないですけど、これぞ庶民のお庭って感じがしてすごく好きです。

一お忙しい中、貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。



文明開化期の清澄庭園

以前は隅田川から内部河川を通じて引水していた。また来賓を舟で招く際の水運としても利用された。



向島百花園

当初は梅が主であったが、その後、詩歌にゆかりのある草花が集められ、四季を通じて花が咲く花園となった。

ようこそ B4、拓け我道！

Self-introduction from New B4 Members!

今年度は5名の学部4年生が都市デザイン研究室のメンバーになりました。既に1年半の時を共にしている彼らですが、出身地や嗜好する空間は多種多様。これから1年間、卒業論文/設計と向き合う中で各々の理想や思考を言葉にし、形にし、都市工学の「専門家」として一つの答えを導いてくれるでしょう。

時に上級生からアドバイスをもらい、そして上級生は彼らから刺激をもらい、その相乗効果によって研究室として成長していくことが望ましく思います。

今回はそんな彼らをちょっぴり掘り下げてみます。個性豊かな自己紹介を是非ご覧あれ。

- 凡例
- ①出身地
 - ②都市デザイン研究室を選んだ理由
 - ③好きな街、都市と理由
 - ④趣味
 - ⑤これからチャレンジしたいこと



結構人見知りするので、初めは温かく見守ってください

河崎 篤史 Atsushi Kawasaki



- ①福岡県福岡市
- ②自分の提案を何らかの形にしたいと思ったから。あとは単純に研究室の楽しそうな雰囲気と先生・先輩方の顔ぶれです
- ③『ベネツィア』：自動車社会において水運が主要な交通の社会が残っているのが衝撃だった。排気ガスや騒音がないため人々のにぎわいがまさに街にあふれており、時間がゆっくりと流れていて心地が良かったから
- ④写真、ギター、旅行、おいしいご飯とお酒（特にビール）、アウトドア（スノボ・登山）
- ⑤積極的に現場にかかわって経験を積みたい。Photoshop を使えるようになる



これからお世話になります。よろしくお願いします！

野上 正行 Masayuki Nogami

- ①千葉県浦安市
- ②演習・講義や富山PJなどを通して素敵な先輩方・先生方が多いと感じたから
- ③『足尾』：製錬所、発電所、貨物線の線路、鉱山労働者向けの住宅、小学校など、かつての産業や生活の遺構が廃墟となって自然の中に埋もれてゆく様相が好きです
- ④深夜ラジオ（「オードリーのオールナイトニッポン」など）
- ⑤都市を語る視点や語彙を増やしていきたいです



よろしくお願い致します

鈴木 直輝 Naoki Suzuki

- ①新潟県新潟市
- ②個性豊かな3人の先生方の視点から様々なご意見をいただきたいと思ったから
- ③『新潟・やすらぎ堤』：都市空間のにぎわいを少し感じながら、信濃川と芝生の自然の中でゆったりできるから
- ④サッカー
- ⑤自転車で日本一周まちめぐり



ワクワクと同時に不安を抱えています... 笑
1年間よろしくお願いします！

廣瀬 真衣 Mai Hirose

- ①大阪府大阪市
- ②人の生活が見えにくい広範な計画はあまり好きではないため、具体的な敷地を対象に研究を行いたかったから
- ③『アムステルダム』："中央駅を中心に扇状に張り巡る運河"と"隣り合う住居が外壁を共有している様子"が特徴の街の景色がとても印象的だったから
- ④バレエ、絵を描く、散歩、ホラー・サスペンス映画鑑賞、華道、漫画を読む
- ⑤育児と就業の両立を支える都市空間/構造を研究したいです



辛いもの大好きです！
おすすめあったら教えてください

小林 拓人 Takuto Kobayashi

- ①千葉県一宮町
- ②演習で一番やりがいのあったものと雰囲気が似ているから、多様な価値観からまちを見れるから、教授やTAのメンバー
- ③『下北沢』：狭い中でも色々な顔があるから+地元だから / 『みなとみらい』：歴史的な部分、シークエンスを楽しめるところ、利便性と多様性に富んでいるところ
- ④ドライブ、辛い食べ物、UVERworld、RADWIMPS、麻雀
- ⑤問題解決能力を鍛える、卒業論文 or 制作、辛いもののチャレンジ

Information



Hey listen, -ちょっと聞いて！

5.10 今年度最初の富士吉田訪問



継続して社会実験をしている駐車場や展示会場候補である旧郵便局の調査をしました。自分の目で見ることで今年度のPJ活動に期待が膨らみました。(M1 宗野)

5.16 新B4歓迎会！



今年度の卒業論文・制作を当研究室で行うB4の歓迎会が開催されました。これから先生や修士の学生と議論して、納得のいく論文・制作を成し遂げてほしいです。(M1 松本)

5.12-13 新の浦での空き家調査



福山市新の浦で空き家調査のアンケート回収を行いました。私は初めて新の浦を訪れましたが、まちの人々のまちに対する想いの強さをひしひしと感じました。(M1 應武)

5.17-18 小高のまちなか菜園で野菜づくり



家庭菜園の先生を招き講習会を行いました。庭作業や収穫した野菜でのランチを通じ、空地での活動や参加者の幅が広がっています。(M2 奥澤)

世間では5月病なんて言われますが弊研究室は皆さん活き活きとしています。研究室ではカップラーメンを食べてらっしゃる方が多いので、何かご飯でも作ろうかな。

5月のWebマガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



5.19-21 三国まちづくりカフェ開催

三国祭の開催に合わせて、これまでの三国プロジェクトの活動を振り返る展示会を開催しました。(M1 宗野)



5.23-26 内子現地調査 & 森邸掃除

歴史的建造物活用にむけ、六日市地区の調査に加え、地区内の空き家である森邸の掃除を行いました。(M2 小田島)

6月の予定

Lab Meeting
5th, 20th, 27th

7th-9th	富山PJ 現地調査
11th (Tue)	三国PJ 三国高校レクチャー
12th (Wed)	内子PJ 内子歴まち認定式
13th (Thu)	上野PJ 第3回勉強会
17th (Mon)	高島平PJ 建築学会コンペ提出
18th-19th	小高PJ B4 現地調査

編集後記

何か美しいものを表現しようとしたときに、「えもいわれぬ美しさ」などと言えば、おしゃれな感じがするが、そのものの美しさが他者に伝わっていなければ意味がないだろう。だからこそ、それに適した言葉を求めていると勉強するのだが、そのままでは当たり障りのない定型句ばかりで語ろうようになってしまっただけで味気ない。でもやはり、定型の中に身を置き、そこから「かたやぶり」できたときにより自分の言葉が生まれるはずだ。私はまだ、からをやぶれていないだろうが、少なくとも美しさを伝えることくらいはできているのだろうか。(M2 藤原)